

長期ビジョン(仮称)の市民へのアプローチについての主な意見

○ 意識や関心が高い人にだけ届いても変わらない

- 広く伝えるにはインパクトが必要。市のサイトに載せているだけでは市民に届かない。
- アウトプットそのものが、動きの循環を生むようなものにしたい。
- 市民に対して問いを投げかけることで、自分にとってどうなのかと考えるきっかけになる。

○ テキストベースだけでは限界がある

- 茶会のテーマにしたり、お花のテーマにしたりする形で、私たちが伝えたいことを皆さんにつかみ取ってもらえるような場を作ったりすることができるのではないかな
- 一つ一つ言葉にしていくと、情報量が多すぎるので、それをぼやーっと包み込むようなアウトプットとして考えると、文化、アート、音楽などの形がよいのかもしれない
- フェスやお茶などの体験として、すなわちテキストだけでは伝わらないものを消化して届ける
- 一般市民にも届くように、SDGsの17個のマークのようなアウトプットを考えてみてもいいのではないかな
- 例えばラジオやPodcastで音声配信して議論のプロセスを含めて届ける。

○ ビジョン本冊のライトバージョンが必要

- この長期ビジョンを読解して、自分事にするのは非常に困難だと思うので、もう少し小学生にも分かるようなライトバージョンのガイドラインが必要ではないかな。
- まず分かりやすいテキスト版のようなものがあっても良い。あるいは、動画で分かりやすくするようなものがあっても良いかもしれない。

○ オンラインプラットフォームを活用した継続的な取組

- 可変性のあるデータや、更新やバージョンアップされるものを考える。アイデアバンク的な貯蔵庫という意味でのレポジトリであり、それは誰でもアクセスできる貯蔵庫として、例えば10年前に、ある人が考えていたものを、みんながそこから勝手に取って、付け加えたり、改編してもう一回入れたりということができる世界観
- 例えばNotionであればタグなども付けることができ、そこに例えば環境や、コミュニティ、ケアや子育てなど、それぞれのカテゴリーごとに、本日の議論で出てきたようなキーワードや、参考にしたレファレンス、それこそきれいにしない状態のプロセスの言葉やパーソナルな視点などが、ローデータの的に残り、溜まっていく。
- AIやグラフィックスを絡めて、流動的に動くような仕掛けにして、それが入力だが、もちろん参照もできるし、他の人のコメントにも関わって、タッチして、長期間で、25年間の出力としての役割を持たせる。
- ソニーCSLのウィキトピアのプロジェクトと連携する。
- そういったレポジトリであれば、先ほどの話にあったように、出来合いのものは既にあるが、なぜこれができたかという、その思考のプロセスも、そこで遡って見ることができる。

○ 複数の取組を組み合わせる

- 媒体ごとにアクセスが困難な層がいることを認識した上で、いろいろな媒体を組み合わせて使った方が、より良いのではないか。
- 毎月第3金曜日に京都市役所の前で開催している「小さな芝生広場の実験」に私たちが出向いて、市民と審議会をつなぐコーディネーターとして入って、市民の声を直接審議会の皆さんに届けて、ギャップに気付いてもらい、私たちも私たちの思いをそこで届けながら、市民・審議会・私たちが一体になる場をつくっていく。